

「プラグマティスト」オバマに注目しよう

新たな建国の決意を秘めた就任演説

松尾 文夫

Matsuo Fumio

「オバマのアメリカ」は、2009年1月20日、バラック・H・オバマ新大統領のかぎりなくクールで、含蓄に満ち満ちた就任演説で幕を開けた。

国会議事堂からワシントン記念塔を経てリンカーン記念堂まで、西に向かって一直線にのびる広大な広場、通称モールを埋め尽くした180万人とも、200万人とも言われる史上最大の参加者の興奮と熱気を前に、同じく史上初の黒人大統領が「建国の父たちの試練を思い、しりごみすることなくアメリカ再生の責任を果たそう」と静かに諄々と説いた。深夜のCNNが伝えるこの一幅の絵のような中継画像を見ていて、あらためて「アメリカという国」のふところの深さを思った。

見事な切り替え

オバマ大統領も認める通り、いまこの国を襲っている「危機」は尋常なものではない。待ったなしの対処が求められている。オバマ大統領が就任演説でもブッシュ前政権だけではなく、アメリカ全体の「集団的な失敗」だと定義したアメリカ経済の脆弱性が、世界経済全体を揺るがしているからである。

アメリカの歴史に長く記録されることになるこの就任演説の日にも、ニューヨーク株式市場のダウ平均株価は、御祝儀相場どころか、332ドルも下げた。バンク・オブ・アメリカ危機説のためである。オバマ政権を待ち受ける道の厳しさを物語る「危機の指標」である。

しかし、この「危機」のさなかに、その克服のかじ取り役を黒人大統領に託すところに、「アメリカという国」の凄さがあると私は思う。オバマ大統領の就任演説もいろいろな意味で意表をつき、十分にその凄みをのぞかせたものだった。

まず地味な文言に終始し、ワシントンに集まった参加者のみならず、テレビでウォッチしたアメリカ国民、そして世界中の人々が期待した心地よいフレーズは何一つ飛び出さなかった。オバマ大統領をホワイトハウスに押し上げた2007年以来の選挙運動で、国民の心をつかみ、大成功を収めた「チェンジ、イエス・ウィ・キャン」というスローガンはどこにも姿を現わさなかった。演説テキストをチェックすると、「チェンジ」という単語はわずか1カ所。資源の無駄遣いを自戒した部分で、「世界

が変わったのだから、われわれもそれに合わせて変わらねばならない」と述べただりだけである。

つまり、選挙運動で国民を熱狂させた調子の良いスローガンはびたり封印して、ひたすら「アメリカ再生」の大義への国民の責任と努力と犠牲と、そしてその実現への信念と決意と奉仕の精神の発露を呼びかける内容だった。演説はアメリカ国民に対する辛口の要請の行列となった。その時、モールにいた友人によると、「イエス・ウィ・キャン」連呼の機会をいまかいまかと待っていた参加者の間には、とまどいの空気も流れたという。一部のアメリカメディアの論評でも失望感が語られた。

しかし、私はこの切り替え、すなわちキャンペイナードから統治者への変身が見事だったと思う。選挙運動での成功が実証されている手練のスピーチライター、そして最後にはオバマ大統領自らが練りに練った平易な文章の奥に仕込まれている並々ならぬ意気込みが、ひしひしと伝わることになったからである。

「頼もしい同盟国」の一つとして、この「オバマのアメリカ」の再生に協力することを求められている日本としては、就任演説に込められたその本心をきちんと捉えることが重要である。

以下、私がオバマ就任演説で浮き彫りになったと考える基本姿勢を2点挙げておきたい。

「出直し建国」の決意

第一は、演説の最後を初代アメリカ大統領となるワシントンの大陸軍（アメリカ革命軍）司令官時代のことばで締めくくったことを重視したい。現在の難局克服を、事実上の新たな建国と捉える強い決意が表明されたということだからである。

「将来の世界に語らせよう。希望と美德以外生き残れない厳寒の日々に、共通の危機にさらされた都市・地方はそれに立ち向かったと」。

この引用文は、1776年12月、現在のニュージャージー州トレントンへの奇襲で、イギリス国王軍に追いつめられていたアメリカ大陸軍が反撃に転じる直前に、司令官としてのワシントンが大陸軍に志願して参加していたトーマス・ペインの文章を引用して、兵士たちを鼓舞するために使ったことばである。2007年の出馬宣言以来、自らの選挙運動のモデルとしてなぞらえてきたリンカーンを飛び越して、建国前のワシントンにまでさかのぼり、ワシントンの苦難と現在の危機を対置させたところに、この新たな建国にかけるオバマ大統領の気持ちが凝縮されていると思う。

つまり、アメリカ合衆国憲法が制定され、ワシントンが初代大統領に就任する1789年の13年も前の「アメリカ合衆国」という国のかたちさえでき上がっていない段階にまで戻って、「アメリカ再生」を目指しているということである。これには、リンカーン大統領の1863年の奴隷解放宣言を通り越して、黒人人口についてはその

全体数の5分の3しか住民として数えない明白な差別規定をもったアメリカ合衆国憲法が1788年に制定される以前の、制度的には黒人差別自体が存在しなかった「差別以前」の時代にまでさかのぼって、アメリカ再生のスタート台を設定しようという深慮遠謀が感じ取れるからである。

黒人差別というアメリカの歴史の「恥部」には正面から触れず、合衆国憲法制定から奴隷解放宣言までの75年間で「われわれは内戦や人種差別の苦渋を味わい、その暗い歴史からより強く、より団結し、再浮上した」とあっさり片付けることで、白人保守層まで取り込んで、拳国一致の新たな建国で出直そうという、巧みな和解メッセージの発信だったと思う。

オバマ大統領は自らがアメリカ史上初めての黒人大統領であるという事実については、ワシントン引用文の直前に「60年前ならレストランで食事をすることもできなかったかもしれない父をもつ男が、最も神聖な宣誓を行なうために皆さんの前にこうして立つことができたのだ」というさりとした表現で触れただけだった。そして「だからわれわれが誰なのか、どれだけ長い道のりを歩んできたかを振り返りながら、この日を胸に刻もう」と畳み掛けた。

こうしたオバマ大統領の姿勢の延長線上には、「アメリカおよびその指導者はまだ国として人種差別主義と奴隷制度の過ちを認め、許しを請うていない」との過激な反アメリカ発言でキャンペーン中に絶縁を迫られた、ライト牧師との和解の可能性も視野に入ってくる。ライト師が求める「アメリカ合衆国からの謝罪」と受けとめることもできるからである。この黒人差別問題の位置付けに象徴されるようなオバマ大統領の新たな建国、ことばを換えれば、「出直し建国」を構想する大きなスケールの野心的なメッセージを忘れてはならない。

目指す超党派基盤

第二は、就任演説で、オバマ大統領のプラグマティストとしての資質が十分に発揮されたという事実である。その資質は昨年11月4日の大統領当選後の2ヵ月半で実証されていた。スピーディーに打ち出した新政権づくりで、サマーズ(国家経済会議議長)= ガイトナー(財務長官)の師弟コンビによる経済危機対応チームの構築、指名争いを最後まで戦ったヒラリー女史の国務長官起用、ゲーツ国防長官のブッシュ前政権からの留任 と、70%を超す世論の支持を得た現実的な超党派人事での展開は、目をみはらされるものだった。

就任演説では、このバランスのとれたプラグマティスト、あるいはリアリスト、あるいは故デービッド・リースマン流の表現をすれば「第一級のオポチュニスト」としての政治的才能がさらに縦横に冴え渡った。就任式直前のネオコンまで交えた保守派オピニオン・リーダーとの夕食会、マケイン共和党候補との懇談 と、保

守派まで目配りしたその具体例には事欠かない。

まず、演説で登場した順で言うと、ブッシュ政権のもとで頑なに守られた「小さな政府の政治」に対し、かつての大恐慌時のニューディール政策のような「大きな政府の政治」への転換が行なわれるのではないかとの観測には、「時間を浪費しすぎた黴臭い政治論争はもはや通用しない。いまわれわれが問うているのは、政府が大きすぎるか、小さすぎるかではなく、機能するかどうかだ」と述べて、あっさりはぐらかした。同じく規制緩和に歯止めがかからず、金融危機の元凶となった市場問題については、「市場が善か悪かという問題ではない。市場ほど富を生み、自由を広げる力をもつものはない」と「市場に対する監視」を条件としながらも、はっきりした支持を表明した。

「先人たちがファシズムと共産主義を屈服させたのはミサイルや戦車によってだけではなく、頼もしい同盟国と強靱な信念によってであることを思い起こしてほしい」と前政権の一国主義からの決別を明らかにした。

その一方で、テロに対しては「われわれの精神はあなた方より強く、決してくじけない。先に倒れるのはあなた方なのだ。われわれは必ずあなた方を打ち負かす」と強いことばで戦いの継続を宣言した。

「いまも地球上で最も繁栄した強い国である」アメリカを築いてきた「いまも続く旅」のなかで、先人たちが命をかけた「戦場」として、革命戦争のコンコード、南北戦争のゲティスバーグ、第2次世界大戦のノルマンディーに続いて、ベトナム戦争の激戦地、ケサンを挙げた点も、保守派を意識した思い切った選択である。ベトナム戦争の現場を1975年4月30日の旧サイゴン陥落まで3年間取材し、その後のアメリカ国内をおおった「ベトナム・シンドローム」の傷跡をいやというほど知る私にとって、ケサン言及は感慨深く、オバマ大統領のプラグマティストとしての肝っ玉を見た思いだった。

ただし、イスラム世界に対しては、はっきりと和解の一步を踏みだした。「相互の利益と相互の敬意に基づいた新しい道を求める」、「握りしめたこぶしを開けば、われわれは手をさしのべる」と和解のことばを明言、アフガニスタン戦争についても、「苦勞しながらもアフガニスタンに平和を構築する」と武力行使一本槍ではないバランス感覚をみせた。アメリカ軍の追加投入が既定事実となろうとしているなかで、あえて平和構築を口にするとところが興味深い。

WSJ紙も支持

このほか、「核の脅威をたゆまぬ努力で削減し、地球温暖化という妖怪を押し戻す」と重い課題への挑戦をたった一言で片付けているところも、善し悪しの議論を封印した点で、逆に迫力をもつことになった。

面白いのは、「この国が最後に頼りにするのはアメリカ国民の信念と決意だ」と述べたうえで、「堤防が崩れた時に見知らぬ人を受け入れる優しさ、友人が職を失うくらいなら自分の労働時間を短縮する無私心が暗黒の時にわれわれを支えてくれる」とワーク・シェアリング支持を述べているくだりである。労働組合の全面的支持を受けて勝ち抜いてきたオバマ大統領としては、大胆な「無私心」による奉仕のアピールである。

したがって、保守的で、かつてネオコンの論客を育てたことで有名な『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙でさえ、1月21日付の社説で「いわゆる“責任の時代”」と題して、「党派的な立場がどうであれ、200万人のアメリカ国民の歓声のなかで権力の平和的な移行が行なわれたこと自体に愛国的な誇りを感じる」との書き出しで、「今後この第44代大統領と意見を異にすることがあるだろうが、国民に大きな責任と新たな国家目標を与えた就任演説はすべてのアメリカ人を一つにするものだった」と好意的な論評で結んだ。

同紙はこの評価の理由として、「オバマ大統領は、左派の支持者の多くや世界の人々がアメリカの安全保障政策を『9・11』テロ以前の段階に戻すのではないかと期待したのに反して、アメリカを守る政策を投げ捨てないことを明らかにした」ことを挙げている。

早くも、オバマ大統領のプラグマティストとしてのバランス感覚が保守派勢力を巻き込み、若干の不満をかかえながらも、いまオバマ支持以外にもいきよのないリベラル派、左派、組合勢力とともに大きな超党派路線を確立する大目標に向けて、一步を踏み出した、というわけである。

ここで最後に、私は就任演説を彩ったオバマ大統領のしたたかなプラグマティストとしての資質を鍛え、育てた「シカゴの政治」について報告しておく。オバマ超党派路線の成否のみならず、「オバマのアメリカ」そのものの行方を占う材料となるからである。

「シカゴの政治」で学ぶ

ハワイ生まれのオバマ大統領は1983年にコロンビア大学を卒業後、ニューヨークの出版社やNPOで働いたあと、1983年にシカゴに移る。シカゴ市内の黒人地域活性化事業の管理者に就職したためだ。

しかし、1988年から3年間、ハーバード大学のロー・スクールに学費融資制度を使って学び、黒人としては初めての『ハーバード・ロー・レビュー』編集長に選ばれ、最優等で卒業、最高のエリートの地位を手にしてシカゴに帰還したころから政治家の道が開ける。同じハーバード・ロー・スクール出身の弁護士で、「彼女がオバマを本当のアメリカ人にしたのだ」とわたしの長年の黒人の友人が語るミッシェル

と結婚したのもこのころである。

当時のシカゴ民主党の大ボス、エミル・ジョーンズの引きで1996年のイリノイ州上院議員選挙に立候補、当選する。ロビイストたちとのポーカー・ゲームやゴルフのつき合いも一生懸命こなし、「ゴルフ・コースではすさまじいことがいっぱい起こる」と友人に述懐した当時のオバマ大統領のことばが残っている（2007年7月30日付『ニューヨーク・タイムズ』紙）。

アメリカ政治史のなかでも「シカゴの政治」は、19世紀末からアイルランド移民を中心とする「マシーン」と呼ばれる党組織が市政を握る民主党の金城湯池として有名だった。市長のパトロネージ（人事任命権）によるスポイル・システム（獵官制度）で公職が決まるため、腐敗、汚職、ボス支配があたりまえ、マフィアとも紙一重のような党組織だった政治的風土の「伝統」がいまも残る。デイリー現市長の父親が君臨していた1960年のケネディとニクソンが戦った大統領選挙では、シカゴ市内でケネディへの不正投票があったことで知られる。

オバマ大統領はこの「伝統」と一線を画する改革派の旗手としてのし上がる。しかし、親しい友人で、政治家としての初期の活動の支援者であったデベロッパーが汚職容疑で2007年に逮捕され、現在も公判中である事実からも明らかなように、オバマ大統領はこうした「シカゴの政治」の暗い顔とも州上院議員として6年間、すれすれのところでつき合いながら、改革派政治家として生きのび、2004年の連邦上院議員当選、そして大統領当選と階段を一気にかけるのぼってきた。このプラグマティストとしての軌跡をはっきりと覚えておかねばならない。

この辺の「シカゴの政治」とのきわどい関係は、昨年12月、オバマ後任の上院議員の指名権をもつブラゴジェビッチ＝イリノイ州知事が後任指名候補からの収賄容疑でFBIに逮捕される事件が起こった事実を報告するだけで十分だろう。もちろんこの知事はオバマ大統領、エマニュエル首席補佐官、アクセルロッド上級顧問らホワイトハウスに居座ることになったシカゴ人脈と旧知の仲である。

1300万人のEメール・プレッシャー・グループ

そして、シカゴ市の政治マシーンについて研究する若手政治学者、釧路公立大学准教授、菅原和行氏の論考（「1960 80年代のシカゴ市における人事行政の変容」『釧路公立大学地域研究』第15号、2006年12月）が言うように、この「シカゴの政治」では、市長がスポイル・システムの「柔軟な運用で政治的影響力を維持しようとする過程で、黒人をはじめとするエスニック・マイノリティからの市幹部登用が不可欠だった」という現実がある。要するに、オバマ大統領の黒人という出自、さらにハーバード卒の超エリート弁護士という経歴が百パーセント生かされる環境にあったというわけである。黒人であることがマイナスではなくプラスとなったのである。

この「シカゴの政治」のメカニズムと仲良くし、「誰とでも話し、その相手を自分と同意見だと思い込ませてしまう」(前掲『ニューヨーク・タイムズ』紙)対話、調整能力を磨いたオバマ大統領としては、47歳にして手中にしたこの「百戦錬磨」のプラグマティストとしての実績と自信のうえでのホワイトハウス入りだったということになる。

あまりにも地味な内容にアメリカのメディア、世論もとまどった就任演説は、この第一級のプラグマティストのしたたかな第一声であったと、捉えると理解しやすい。

しかも、このオバマ・ホワイトハウスは、その数1300万人とも言われる「オバマ・インターネット軍団」のEメール・アドレスを手中にしている事実を忘れてはならない。これはホワイトハウス自らが巨大な「プレッシャー・グループ」をかかえ込んでいることを意味する。議員への圧力、世論操作など、その効用は、はかり知れない。これまたアメリカ政治史上初めての出来事である。

初の黒人大統領という画期的な出来事もすでに過去の一ページとしてしまい、新たな建国を夢見るオバマ大統領のもとでの「アメリカという国」の未知の凄さ、怖さ、そしてその国とつき合っていかなばならない日本の難しさを肌で感じる就任演説であった。

(2009年1月29日)

まつお・ふみお ジャーナリスト

http://homepage.mac.com/f_matsuo/blog/fmblog.html